



# うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

## 第30号

発行日：平成21年3月20日

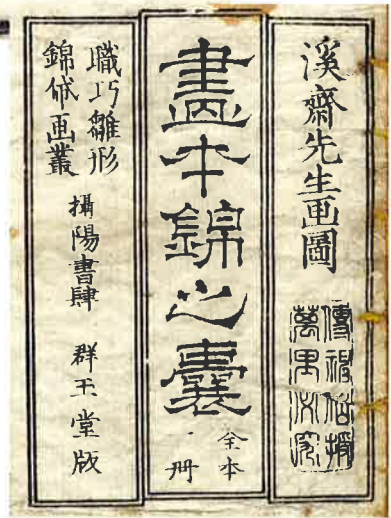
編集発行：魚津埋没林博物館

印刷：魚津印刷（株）

## 江戸のアクセサリーデザイン



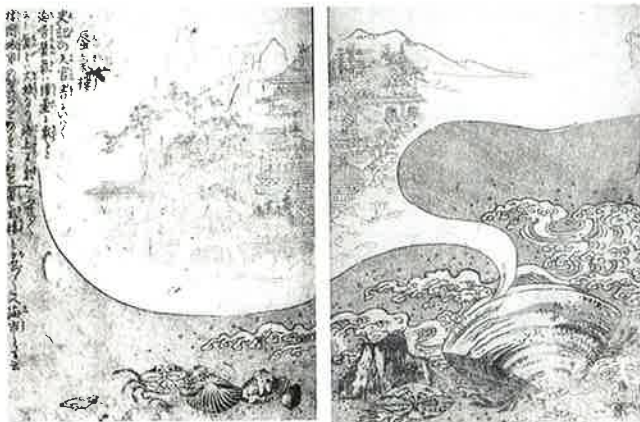
ハマグリが煙のような息をはき、その中に楼閣が現れる蜃気楼の図・・・そんなデザインのアクセサリーはいかがでしょうか？この絵は、江戸時代の工芸職人のために作られた図案集「画本錦之囊（えほんにしきのふくろ）」にある、かんざしのデザイン画です。はたして、実際に作られて女性の髪を飾ることがあったのでしょうか。



## 江戸時代に流行した“蜃気楼図”

学芸員 石須 秀知

“蜃”という生き物が気をはいて幻の楼閣を現す……2000年以上昔の中国の言い伝えから、蜃気楼という言葉が生まれました。“蜃”という字には2通りの意味があり、蛟龍(こうりゅう)という龍の仲間を示す場合と、大型のハマグリ(ハマグリ)の仲間を示す場合とがあります。おそらく昔本来の意味では、蜃気楼を吐き出す生き物は、龍の蜃だったと思われます。しかし、時代が下るにつれて、食用にもなる身近な貝の蜃と混同され、龍と貝が置き換わっていったのではないのでしょうか。そして、ハマグリが楼閣をはき出す“蜃気楼図”のデザインが中国で生まれ、それは江戸時代ごろに日本にも伝えられたようです。



鳥山石燕「今昔百鬼拾遺」の蜃気楼図

日本での蜃気楼図は、はじめは中国の珍奇な現象として、あるいは妖怪変化の一種として、絵画の題材にされていたようです。江戸時代後半の18世紀末以後、いろいろな絵師によって蜃気楼図が描かれています。中でも1780年に刊行された鳥山石燕(とりやませきえん)の「今昔百鬼拾遺(こんじゃくひゃっきしゅうい)」に収められている「蜃気楼」の図版は、日本の絵師が描いた蜃気楼図の中でも古いものの一つです。

この「今昔百鬼拾遺」は、現在で言えば妖怪百科図鑑シリーズとでもいうべき本の一つで、普通の絵画作品よりも人々の目に触れる機会が多かったと思われます。そのため、その後の蜃気楼図にも少なからず影響を与えたであろうと考えられます。

江戸時代も終わりに近づき、町人文化が花開いた19世紀には、蜃気楼図はめでたい文様として認知されるようになってきたようです。それとともに、奇抜で幻想的なデザインが好まれたためか、各種の工芸品に取り入れられるようになりました。

表紙で紹介したかんざしのデザイン画は、溪斎英泉(けいさいえいせん)という当時の人気浮世絵師が描いたものです。そのかんざしが実際に作られたかどうかは、今のところ資料がないのでわかりません。しかし、アクセサリデザインとして蜃気楼図には一定の需要があったようで、根付(ねつけ:小物をぶら下げるため帯にはさむ道具)や刀のつばなど、有名無名を問わずいろいろな職人が手がけた工芸品が残っています。



ハマグリの中の楼閣=蜃気楼を表現した根付



それらは、おそらく富裕な商人や武家などからの注文を受けた職人が一点ずつ手作りした、言わば特注品だったのでしょう。



蜃気楼図のつば

陶磁器も、九谷などで手の込んだ蜃気楼図の大皿や大鉢が作られました。そのような高級品を所有できる人は限られるため、生産量はきわめて少なかったと思われます。しかし、蜃気楼図の認知が一般にも広まると、そうした一点物ではない量産品の陶磁器にも描かれるようになります。量産陶磁器には、皿や鉢、碗など日用の食器のほか、茶道で使う香合などもありました。それらに描かれた蜃気楼図は、大半が染付(そめつけ)と呼ばれる青一色の簡素な絵付けです。量産とはいっても、当時はほとんどが手



量産された蜃気楼図の陶磁器

描きだったため、一点ごとに微妙に絵柄が異なります。そこには、手の込んだ工芸品とはまたちがった味わいやおもしろさがあります。さらに、絵付師の多くは蜃気楼図の意味をあまりよく知らなかったのか、見まねによる描き写しやアレンジが繰り返されたようで、やがて伝言ゲームのようにもとの意味や形を失っていきます。その結果、ハマグリがアワビや巻貝など別の種類の貝になったり、はき出されるのが楼閣以外のものになったりと、自由な変化も見られるようになります。器を使うほうでも、その文様の意味合いなどは、あまり考えなかったのかもしれませんが。



これも蜃気楼図？

こうして日用品にも描かれるほど市民権を得ていたと思われる蜃気楼図ですが、江戸時代が終わり、明治、大正と時代が進むにつれ、工芸デザインとしては徐々に姿を消していったようです。それは、単に古くさいと思われ、飽きられてしまったのでしょうか。あるいは、西洋の科学が流入し、国内でも科学研究が発展する時代となって、ハマグリが楼閣をはき出す様子が非科学的で荒唐無稽なものとして敬遠されるようになったためでしょうか。その真相は分かりませんが、どんな流行もまさに蜃気楼のようにやがて消えてしまうというのは、今も昔も変わらないことのようにです。

# シリーズ

## 埋没林の仲間たち ②9

### イネ科

イネ科は、植物の中でも多くの種類を含む大きなグループの一つです。種類の数が多いということは、それだけ多種多様な環境の場所へ進出していることを物語ります。海岸～高山、乾燥地～水辺、市街地～森林と、いろいろな場所でイネ科の植物が見られます。また、イネやコムギ、トウモロコシなどの穀物や、サトウキビなど重要な作物もイネ科の一員です。

イネ科の植物の多くは、きれいな花が咲かず、細かい花が集まった穂を出し、細長い葉をつけ



水辺に生えるアシカキ

るなどよく似た特徴を持っていて、区別が難しい植物グループの代表です。



細かい花の穂(ヒゲノガリヤス)

\* \* \*

魚津市内では、海岸から高山まで、帰化植物を含めて130種類以上のイネ科の植物が記録されています。

魚津埋没林では、平成元年の発掘調査でイネ科の花粉が検出されています。水辺に生える種類や森に生える種類など、多くのイネ科植物があったと思われます。

### お知らせ

#### ●平成21年度のおもな行事予定

##### ☆企画展示

蜃気楼写真展 ————— 5月1日(金)～7月31日(金)  
 KAZE(かぜ)展 ————— 8月1日(土)～10月31日(土)  
 魚津ナチュラルギャラリー⑩ 1月2日(土)～4月30日(金)

##### ☆ふれあい学習会

食べられる草ど～れだ? ————— 4月25日(土)  
 四葉のクローバーみつけた! ——— 5月23日(土)  
 野草でチャチャ茶 ————— 9月26日(土)  
 魚津周辺のスギと埋没林のルーツ — 10月24日(土)  
 つるつるつくる ————— 11月21日(土)  
 冬の蜃気楼ウォッチング —————  
 12月13日(日)・1月17日(日)・2月14日(日)

### ご利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
- 休館日 12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始(4月～11月無休)
- 入館料 ・大人(高校生以上)・・・510円 ・小中学生・・・250円
- 交通 ・JR北陸本線魚津駅 } 下車1.5km (タクシー・・・5分)
- ・富山地方鉄道 新魚津駅 } 徒歩・・・25分)
- ・北陸自動車道魚津ICから3km車で10分

#### 特別天然記念物 魚津埋没林博物館

〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765) 22-1049  
 ホームページ <http://www.city.uozu.toyama.jp/nekolnd/>  
 e-mail [nekolnd@city.uozu.toyama.jp](mailto:nekolnd@city.uozu.toyama.jp)

